

カリキュラムマップ（理学療法学科）

理学療法学科のカリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

社会人、医療人として必要とされる広範で多様な基礎的知識と基本的な学習能力の獲得のため、すべての学生が履修する全学共通科目として基礎科目、教養科目、総合科目、言語・情報科目を配置する。特に、理学療法士になることへの強い意志と自覚を持たせ、学習意欲を高め、理解力と行動力を身につけるために、1年次・2年次では「基礎ゼミ」「応用ゼミ」、3年次では「研究ゼミ」「理学療法計画論Ⅰ」「理学療法計画論Ⅱ」、4年次では「卒業研究」「理学療法総合演習」といった少人数制によるきめ細やかな教育体制を整備した。加えて「婦人学科」「ウィメンズヘルス」といった女性の見識を深める科目を整備した。専門基礎科目と専門科目では系統的な積み重ね学習を行えるように講義と実技実習を交互に配置・開講し、幅広い視点をも身につけると共にチーム医療の中で働く専門職としての共通認識を育むために看護学科との共通の講義も開講する。このような教育成果として学生の知識・技能・態度を評価するために臨床実習前では客観的臨床能力試験（OSCE :Objective Structured Clinical Examination）を実施し、臨床実習後では卒業試験を課して、女性理学療法士としての清潔さ、誠実さ、忍耐力をも確認する体制を整備した。以上をふまえて、医療・医学分野における科学的根拠に基づいた専門知識と臨床能力を段階的に学び、幅広い教養を修得し、心理面を含めて人を総合的に把握できる理学療法士を養成する。

理学療法学科のディプロマポリシー（学位授与の方針）

- 知識・理解
 - 理学療法士に求められる倫理的態度を理解している。
 - リハビリテーション医学に関する標準的な知識を身につけている。
 - 対象者を精神的、身体的および社会的側面から理解している。
- 汎用的技能
 - 理学療法学領域や関連する学問領域の知識・手段を活用することができる。
 - 対象者の症状および病態、障害をリハビリテーション医学的に分析し、論理的に表現することができる。
 - 理学療法の特長に基づき、保健・医療と福祉の連携のためにチーム医療の一員として行動することができる。
- 態度・志向性
 - 対象者とその家族のために社会的責任を果たそうとする態度を示すことができる。
 - 対象者の健康を維持、増進するための理学療法への修得を志向することができる。
 - 様々な国の人・文化を理解し、理学療法士として国際的な視野をもつことができる。
- 統合的な学習経験と創造的思考力
 - 人間と社会、自然と環境について常に関心を持ち、主体的に学習を続けることができる。
 - 急性期医療から地域ケアにいたる課題を科学的根拠に基づいて探求することができる。
 - 国際的視野を持ちながら理学療法の特長および新たな方向性を常に探究し続けることができる。

理学療法学科カリキュラム								カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーを達成するために ◎ 特に重要な項目 ○ 重要な項目 △ 履修することが望ましい項目			
授業科目名	授業科目のねらい	授業科目の到達目標	単位数 (○印は必修)	配当年次	開講区分	レベル (低1～4高)	アクティブラーニング※の実施について (具体的にお書きください)	知識・理解 (基礎力)	汎用的技能 (思考力・実践力)	態度・志向性 (思考力・実践力)	統合的な学習経験と創造的思考力(実践力)
人体の構造Ⅰ	・人体の骨格系・筋系の構造について理解できるようになることを目的とする。	・人体の構造についての知識を身につけ、それを臨床へ活用できるようになることを目標とする。	1 ○	1	前期	2	—	◎	○	○	△
人体の構造Ⅱ	・人体の各器官の構造を中心に系統的に学習することにより、疾病・障害とその理学療法理論を理解するための基礎学力を習得する。 講義内では積極的に問題形式を取り入れ、能動的な内容理解への取り組みを促す。 また期間後半には、それまでに触れた問題の解答を導き出すために必要な知識について、各個人がまとめ発表する機会を設け、それにより生体機能としての理解をより深めることをねらいとする。	・人体の各器官の名称、位置、構造を理解することができる。	1 ○	1	前期	2	課題発表会の実施(まとめ方、発表スキルについても指摘)	◎	△	△	△
人体の構造Ⅲ	・頭頸部や脊椎の構造並びに神経系の構造について理解できるようになることを目的とする。	・人体の構造についての知識を身につけ、それを臨床へ活用できるようになることを目標とする。	1 ○	1	後期	2	—	◎	○	○	△
人体の生理機能Ⅰ	・理学療法の特長と技術を習得し、急性期医療から地域ケアにいたる課題を科学的根拠に基づいて探求することができる基礎として、人を生理機能の側面から把握し理解できる。	・生理機能の内、血液・循環、呼吸、消化吸収、排泄、内分泌、生殖といった植物系機能について説明できるようになる。	1 ○	1	前期	2	—	◎	○	○	△
人体の生理機能Ⅱ	・人体の筋系、神経系、感覚器系について知り、その生理機能について十分に理解できるようになることを目的とする。	・人体の生理機能の動物機能について説明でき、人体構造と機能の関連について十分理解できるようになる事を目標とする。	1 ○	1	後期	2	—	◎	○	○	△
人間発達学	・医療臨床においては、「生涯人間発達」という視点で、人の一生におけるライフサイクルを理解し、援助する対象者の発達段階と発達課題を踏まえつつ、個別にかかえる問題に対して支援することが重要となる。この授業では、人が発達の各段階で遭遇する課題、それを通して人間関係や生き方を学ぶ過程を理解し、それに基づいた援助の考え方について習得する。	・生涯人間発達の視点と発達理論、その中で母子関係や人間関係の果たす役割について理解する。 ・エリクソンの発達論に基づき、人のライフサイクルのそれぞれの時期の特徴と発達課題、それに基づく支援や指導方法を理解する。 ・発達の各領域(運動・言語・認知など)の変化を知り、領域間および環境との相互作用の中で発達が促進される過程を理解する。	1 ○	1	前期	2	—	◎	○	○	△

授業科目名	授業科目のねらい	授業科目の到達目標	単位数 (○印は 必修)	配当 年次	開講 区分	レベル (低1～4高)	アクティブラーニング※の 実施について (具体的にお書きください)	知識・理解 (基礎力)	汎用的技能 (思考力・実践力)	態度・志向性 (思考力・実践力)	統合的な学習経験と創 造的思考力(実践力)
運動学入門	・運動学入門では、運動学Ⅰと運動学Ⅱの講義を理解するために必要な運動器の解剖生理学とバイオメカニクスの基本的な知識を教授する。運動器の解剖では、運動面と運動軸の関係から主な運動方向の定義を説明する。また、運動を生じる身体構成要素(骨、筋肉、神経など)を説明し、単純な運動形態(筋肉が収縮すると、関節はどのように動くかなど)を説明する。バイオメカニクスでは、基礎的な運動力学の理解を促し、身体がどのような力で動くのかを考えさせる。	・理学療法士に運動学が必要な理由を理解することができる。 ・運動方向の定義と運動が生じるための身体構成要素を理解することができる。 ・運動学に必要な物理学(特に力学)が、身体がどのような力で動くのかを理解することができる。 ・運動をコントロールするメカニズムを理解する。	1 ○	1	前期	1	日常の動作の中で使用されている関節運動を探してくる課題を出している。	◎	○	○	○
運動学Ⅰ	理学療法に必要な関節の構造と機能、筋の構造と機能を学ぶ。部位としては、主に上肢帯の構造と機能を学ぶ。また、関節運動の理解のために必要な神経系の機能を学ぶ。	人体の関節と筋肉の構造と機能を理解できる。 上肢帯の関節の構造と機能を理解できる。 上肢帯の筋の機能が理解できる。 運動を理解するために基礎的な神経系の構造と機能について理解できる。	1 ○	1	後期	2	—	◎	○	○	△
運動学Ⅱ	理学療法に必要な関節の構造と機能、筋の構造と機能を学ぶ。部位としては、主に下肢帯・脊柱・体幹・顔面の構造と機能を学ぶ。また、運動学習の理論について学ぶ。	人体の関節と筋肉の構造と機能を理解できる。 下肢帯・脊柱・体幹・顔面の関節の構造と機能を理解できる。 下肢帯・脊柱・体幹・顔面の筋の機能が理解できる。 運動学習の理論が理解できる。	1 ○	2	前期	2	—	◎	○	○	△
運動学演習	実験実習により身体運動を学ぶ。本実習では、運動時の筋活動、筋力と関節角度の関係、姿勢の違いによる安定性への影響、動作中の関節角度変化・重心位置の変化を学習するために、それぞれにおける課題を与えて学生が主体になってグループで学習する。これらの実習を通して、歩行や基本動作の観察・測定・解析を習得し、身体運動のメカニズムの理解を深める。	・筋活動から単関節筋と二関節筋の違いが理解できる。 ・筋力と関節角度や角速度との関係が理解できる。 ・関節角度や筋肉の柔軟性など様々な計測方法を理解できる。 ・身体の重心位置と支持基底面との関係から姿勢の安定性を理解できる。 ・歩行や立ち上がり動作における下肢関節の角度変化・身体重心位置の移動が理解できる。	1 ○	2	前期	3	1グループ8名、4～5グループで被験者役、計測者役の役割分担をし、チームビとして5つの課題に学生が主体的に取り組む。また、グループ間での情報伝達の時間を設定し、各課題に取り組む際の計測方法などをお互いに教え合うことによって理解を深めさせる。	◎	○	○	○
臨床運動学	・正常動作を理解し、動作分析が可能となる。また、動作分析と理学療法の対象となる症候群や疾患で見られる障害と関連させて患者の臨床像を考えることを学習する。 ・体幹・脊柱の関節の構造と生理的機能とその異常について教授する。 ・ヒトの運動とその障害について神経生理学的な視点から教授する。 ・関節運動の異常や筋力の低下などによって生じる歩行や基本動作の障害の運動学的な解釈について教授する。	・基礎運動学全般を復習し、知識を整理する。 ・体幹・脊柱の関節の構造と生理的機能とその異常について理解する。 ・ヒトの運動とその障害について神経生理学的な視点から理解する。 ・関節運動の異常や筋力の低下などによって生じる歩行や基本動作の障害の運動学的な解釈について理解する。	1 ○	2	後期	2	—	◎	○	○	○
運動生理学	・運動を利用して身体機能の回復を図る理学療法士にとって、運動中の呼吸・循環調節、代謝調節エネルギー産生について把握しておくことは非常に重要である。この授業ではそれらの基礎的内容について修得することを目的としている。	・運動に必要な器官の機能、構造、その役割について理解する。 ・運動中のエネルギー供給、呼吸 ・循環器系の反応、酸素摂取量、無酸素性と有酸素性の代謝などについて理解する。 ・体力の測定方法について理解する。	1 ○	1	後期	2	—	◎	△	△	△
人体の構造演習Ⅰ	・人体の構造演習Ⅰでは、前期科目の人体の構造で学習したヒトの運動器(骨・関節・筋・末梢神経)の解剖学基礎知識に基づき、上肢および腹・背筋群(一部、下肢を含む)の形態と機能、神経支配などを中心に標本や多くの資料(図)を用いて教授する。さらに、筋骨格の構造、表体解剖について、学生同士で体表から骨性指標や筋の形態を触診し、生体における運動器をより立体的な感覚でとらえ、理学療法評価や治療を実施する上で重要な触診技術の習得に役立てるよう説明する。	体幹上部および肩甲帯から上肢にかけて、主に筋骨格を中心として神経、血管の経路や特徴的な解剖学的部位について解剖学的基礎知識を整理し、体表解剖の基本的な触診方法を演習を交えて習得する。	1 ○	1	後期	2	—	◎	○	○	○
人体の構造演習Ⅱ	・人体の構造Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで学習した基礎解剖学知識をもとに、標本観察などから人体の微細構造とその機能を説明する。また、筋骨格の構造、体表解剖においては、実際に学生間で体表における触診演習を行い、より解剖学の知識を深めるとともに、臨床評価や理学療法を学習する上での基盤になるよう説明する。	・標本観察から人体の微細構造とその機能を理解する。 ・筋骨格における体表解剖の基本的な触診方法を習得する。	1 ○	2	前期	2	—	◎	○	○	◎

授業科目名	授業科目のねらい	授業科目の到達目標	単位数 (○印は 必修)	配当 年次	開講 区分	レベル (低1~4高)	アクティブラーニング※の 実施について (具体的にお書きください)	知識・理解 (基礎力)	汎用的技能 (思考力・実践力)	態度・志向性 (思考力・実践力)	統合的な学習経験と創 造的思考力(実践力)
人体の生理機能演習Ⅰ	・人体の機能を理解するために、講義で学習した知識と実際の人体の測定を通じてえられた結果とを関連づける。理学療法に関連が深い生理機能検査である。運動時の血圧、脈拍、代謝の測定を行う運動負荷テスト、肺機能検査、心電図、誘発筋電図、神経伝導速度検査について、その生理学的意味と測定方法について学習する。	・肺機能検査が行えその異常を解釈できる ・心電図が行えその異常を解釈できる ・神経伝導速度検査が行えその異常を解釈できる ・一定負荷運動負荷試験、漸増負荷試験が行える。 ・運動中の呼吸循環機能反応、エネルギー代謝を理解する ・誘発筋電図、神経伝導速度検査を行う上で必要な神経生理を理解する	1 ○	2	前期	2	課題発表会の開催	△	◎	○	△
人体の生理機能演習Ⅱ	・人の機能を理解するために実験を通して講義と関連づける。理学療法に関連が深い生理機能である、心電図、心収縮の特徴、神経伝導の仕組み、筋腫宿の仕組みと疲労等の神経や筋の生理学について、実験動物を用いた実習により学習する。	・小動物を用いた実習への心構えについて学習する ・心臓の電氣的活動の特徴を理解する。 ・心収縮の特徴を理解する。 ・筋収縮の特徴について理解する。 ・筋疲労について理解する。 ・神経伝導の特徴について理解する。	1 ○	2	前期	2	測定前結果予測検討会・測定後結果検討会の開催	△	◎	○	△
精神医学	・リハビリで出会う患者さんに関して必要となる精神障害の知識(疫学、病因、症状と経過、病態生理、診断、治療)について学ぶ。	・精神障害について、用語を説明できる。	1 ○	1	後期	2	—	◎	○	○	△
整形外科Ⅰ	・理学療法士に必要な整形外科を十分理解できる事を目的とする。	・理学療法士に必要な整形外科全般の知識を得て、理学療法臨床へ活用できることを目標とする。	1 ○	2	前期	2	—	◎	○	○	△
整形外科Ⅱ	・運動器疾患の諸問題について高度な知識を習得できるようになることを目的とする。演習問題を通してグループ学習の方法を学び、理学療法士国家試験対策の一環とする。	・高齢者の運動器に係わる様々な問題について十分に理解し、理学療法臨床へ活用できることを目標とする。	1 ○	2	後期	2	—	○	◎	○	△
内部障害学Ⅰ	・心身の機能障害は様々な臓器障害(内部障害)に起因する。したがって、リハビリテーションにあたってはこれらの内部障害についての基礎知識を習得しておく必要がある。循環器疾患、代謝疾患、呼吸器疾患、消化器疾患など生体内環境の障害について、その病態、特徴的に現われる症状、一般的に行われる検査、治療・疾病コントロールのための薬物治療や日常生活の指導事項、合併症や予後などについて基礎的な学習をするとともに、それらの障害と理学療法との関連、理学療法にあたっての対応方針、留意事項などを学ぶ。	・内部障害の原因、症状及び治療を理解して、理学療法士として適切なリハビリテーションを実施することができる。	1 ○	2	前期	2	—	◎	○	○	△
内部障害学Ⅱ	・老年期にみられる障害の特性を理解できるようになることを目的とする。これらの障害は、老化にともなう疾病・障害、生活習慣の蓄積、喪失体験など様々な因子が複雑に絡んで現われる。そのため、老化の機構及び生理学的特性、老年期に特徴的な身体・精神症状及び心理、および高齢者を取り巻く社会的状況、その結果起こる老化に伴う生活機能の変化を幅広く総合的に講義を行う。 また、各論として老年期に多い具体的な疾患について系統・臓器別に講義を行う。	・老年期にみられる障害の特性、具体的には、身体の老化現象、高齢者の心身の特性、老年期に多い疾患についての特徴などを説明することができる。	1 ○	2	前期	2	—	◎	○	○	△
神経内科学	・神経内科疾患を理解することは、理学療法士を目指す学生にとって不可欠であるにも関わらず、大脳から筋肉あるいは感覚器に至る広汎な解剖学的領域に関与する多彩な疾患を学習することに対して負担を感じる学生が多いかもしれません。本講義では、神経・筋疾患でみられる主要な疾患とそれにもなう障害の特性について、その疾患概念、病態、発症機構、神経科学的検査についての基礎知識および治療について学習します。一方通行の授業ではなく、学生が積極的に学習に取り組む自主的な学習態度を期待します。	・神経・筋疾患でみられる主要な疾患とそれにもなう障害の特性について理解する。 ・様々な神経・筋疾患の概念、病態、発症機構、神経科学的検査および治療を理解する。	1 ○	2	後期	2	—	◎	○	△	△
小児科学	・小児科学について知り、理解できるようになることを目的とする。 小児科学について理論的に知識を得て、理学療法士として実践可能になれること。	・小児の正常と異常を理解する。 代表的な小児疾患や障害の特徴を理解する。	1 ○	2	後期	2	—	◎	○	○	△
薬理学	・薬理学とは生体と薬との相互作用について明らかにする学問である。したがって、薬が投与された後の薬の吸収、代謝、体内分布、排泄(薬物動態学)について学ぶ。また、薬がどのような作用機序で効果を発現するのか(薬力学)について学ぶ。	・薬の吸収、代謝、体内分布、排泄について学ぶとともに、感染症、悪性腫瘍、アレルギー・炎症、末梢及び中枢神経系疾患、血液系疾患、呼吸器系・消化器系疾患、物質代謝系疾患に用いられる薬物の作用点および作用機序について理解する。	2	2	前期	2	—	○	○	△	△
栄養学総論	・食べ物と健康の維持・増進および食べ物と病気に関わる知識を講義する。	・食べ物と健康の維持・増進および食べ物と病気とのかわり理解する。	1	1	前期	1	—	○	○	△	△

授業科目名	授業科目のねらい	授業科目の到達目標	単位数 (○印は 必修)	配当 年次	開講 区分	レベル (低1～4高)	アクティブラーニング※の 実施について (具体的にお書きください)	知識・理解 (基礎力)	汎用的技能 (思考力・実践力)	態度・志向性 (思考力・実践力)	統合的な学習経験と創 造的思考力(実践力)
救急医学	・臨床現場で遭遇するであろう事故に対応するため、手当ての基本、心肺蘇生法(AEDの使用法を含む)、搬送、止血の方法などの一次救命処置について、知識や技術を習得する。 ・医師が行う(指示する)二次救命処置について理解する。	・救急医学の概要を理解する。 ・医療従事者として不可欠な救急蘇生法について実際の知識と技術を修得する。	1 ○	2	後期	2	-	○	○	△	△
医学概論	・人類が培ってきた医学の歴史とその進歩を知り、現在の医療状況を理解できるようになることを目的とする。	・現在までの医学の進歩や現在の医療システムについて概説できるようになることを目標とする。	1 ○	1	前期	2	-	△	○	◎	○
リハビリテーション医学	・リハビリテーション医学では、まず医学におけるリハビリテーション医学の位置づけを理解させた上で、その基礎となる障害学について教授する。さらに、障害の程度や影響力を判定するために運動機能およびADLなどに対する評価法を解説する。つぎに、対象となる脳や脊髄の損傷・障害、神経・筋疾患、発達障害、関節リウマチを含む骨・関節疾患、各種内部疾患などの疾病の特徴とリハビリテーション医療について具体的な症例を提示して解説する。	・リハビリテーション医学とは何かについて理解する。 ・リハビリテーション医学における理学療法的位置づけを理解する。 ・リハビリテーション医学で扱う対象疾患を理解する。 ・リハビリテーション医学の評価と治療について理解する。	1 ○	1	後期	2	-	◎	○	○	△
高次脳機能障害学	・高次脳機能障害について概観し、高次脳機能障害の種類、特性について理解し、リハビリテーションを行う際に基本的な評価が実践できる知識を習得する。また、アプローチを工夫するうえで必要な考え方を学ぶ。	・理学療法の実践に必要な高次脳機能障害の知識を習得する。・高次脳機能障害とは何かを対象者に説明することができる。・さまざまな高次脳機能障害とその評価方法、アプローチの工夫について述べるができる。	1 ○	3	後期	3	-	◎	○	△	○
臨床心理	・医療における心理学の概念と、心理アセスメントの要点、メンタルヘルス、医療現場で行われる心理療法について解説する。	・医療現場における、心理学的なアセスメントの重要性について理解すること。また、医療従事者としての対人援助技術について理解すること。	1	2	後期	2	-	◎	○	○	△
医療心理	・病気は、身体的な苦痛や障害をもたらすと共に、心理・社会的側面での苦痛や困難をもたらします。病気の治療やケアにおいては、対象者個人だけではなくその家族をも対象に、各種専門職がそれぞれの専門性を活かしたアプローチが求められます。専門技能をより効果的に活かすために、各種疾患・医療における医療心理学の実際を通じて学習します。	・現代医療における医療心理学の役割を理解する。 ・各種疾患、医療における医療心理学の実際を理解する。 ・理学療法における医療心理学の活用を考察する。	1 ○	3	後期	2	-	○	○	○	△
作業療法概論	・作業療法の目的とする作業の意味を示すとともに、各領域に応じた作業療法の役割について伝授する。理学療法との関わりについて学習し、相互の連携について学ぶ。	1. 作業療法の概念、対象、領域を理解する。 2. 理学療法と作業療法の連携について調べ、まとめる力を身につける。	1 ○	1	後期	2	前期で学習内容を振り返り個人でまとめ、その結果を学生間共有しグループでまとめ発表する。	◎	◎	○	○
看護学概説	・ケアの原理を基盤に、看護とは何かを学び、様々な発達段階にある人の特性、また心身の健康・疾病・障害と人々の生活との関連を知り、看護の果たす役割を学ぶ。さらに様々な場や状況における看護の役割を学び、看護の多様性を知ることをねらいとする。	・看護の概念を知り、看護の役割がわかる。 ・様々な発達段階にある人の特性や生活がわかり、体と心の健康・疾病・障害と人々の生活との関連、および看護の果たす役割がわかる。 ・理学と看護との連携について考察することができる。	1	1	後期	1	-	◎	◎	○	○
リハビリテーション概論	・リハビリテーション医学の概要について理解できるようになることを目的とする。	・医療従事者がどのようにリハビリテーションに関与しているのかについて学び、医療に係わる職業人になるという自覚を持てるようになる事を目標とする。	1 ○	1	前期	2	-	△	○	◎	○
地域ケア論(総論)	・ケアや健康の概念をふまえ、地域ケアの社会資源やマネジメントについて知り、ライフステージにおける地域ケアについて理解できるようになることを目的とする。	・ケアや健康の概念について説明できる。地域ケアの社会資源やマネジメントについて説明できる。ライフステージにおける地域ケアについて説明できる	2 ○	1	後期	2	-	◎	◎	○	○
地域ケア論(各論)	・地域ケア各論では、総論で学習した内容のうち、特に高齢者の地域ケアを中心に学習する。具体的には、介護保険制度の概要、ケアマネジメント(アセスメント、ケアプランの作成方法)の演習を交えて学習する。その中で、公的なサービスだけでは対応できないニーズにどのように対応するのか、実際の事例にふれながら学習しつつ、地域ケアの実際と必要性について理解することを目的とする。また、地域包括ケアの考え方、必要性についても理解することを目的とする。	・高齢者のケアマネジメントについて理解すると共に、各種専門職、専門機関、住民の連携やその必要性について、今日の社会情勢を踏まえて理解する。	2 ○	2	前期	2	-	◎	◎	○	○

授業科目名	授業科目のねらい	授業科目の到達目標	単位数 (○印は 必修)	配当 年次	開講 区分	レベル (低1～4高)	アクティブラーニング※の 実施について (具体的にお書きください)	知識・理解 (基礎力)	汎用的技能 (思考力・実践力)	態度・志向性 (思考力・実践力)	統合的な学習経験と創 造的思考力(実践力)
医療ソーシャルワーク論	・わが国の医療と福祉を取り巻く社会状況は急速に変化している。少子高齢社会に突入した現在、医療・福祉専門職としてリハビリテーション病院や機関、施設・在宅をフィールドとして実践に従事する者には、医療福祉政策の多角的かつ的確な把握や、その実践での活用と専門職間の連携が求められる。そのため、本講義では医療・福祉の他職種協働でのチームアプローチ実践の重要性についての理解と知識を修得することをねらいとする。	・これからの高齢者や障害者支援における医療分野と福祉分野のチームアプローチに必要な医療ソーシャルワークの知識及び技術を中心に、長年の現場経験に基づいた実践事例や障害当事者の体験講義を含め、専門職に必要な「共通性」と「連携・協働」を学び、リハビリテーション分野での業務に反映できうる視点を養うことが本講義の到達目標である。	2	2	後期	2	-	◎	◎	○	○
医療コミュニケーション論	・講義は、自己表現・リスニング・患者とのコミュニケーションの3つの演習により構成している。それぞれの演習を通して医療者と対象者との援助関係を構築するために必要な対人援助技術の基礎力を養う。さらに、演習の体験から自己のコミュニケーションの傾向と課題に気づくことができる。	・対象者との援助関係を構築するために、必要なコミュニケーション技術がわかる ・コミュニケーション技術の基礎を演習で実施し、評価できる ・演習を通して気づいた自己のコミュニケーションの傾向と課題を記述できる	1○	1	前期	1	自己アピール、模擬患者への面談を体験し、その成果を学生間で検討する。	○	◎	◎	△
医療カウンセリング	・健康行動を促進するための、心理・行動的な基礎理論を学び、行動変容を実践、維持するための方法について考える。特に認知行動療法の技法について説明する。	・行動科学の理論が理解でき、認知行動療法の技法を用いて、健康教育の内容を自分で考えて検討することができるようになる。	1	2	後期	2	-	○	◎	◎	△
チームケア論	医療機関や保健・福祉施設等における各専門職の役割を学ぶ。それぞれの専門分野が相互に連携することで、患者の負担を軽減すること及びより高い回復効果のある治療方法を導き出すため、チームが必要であることを理解する。	・医療機関で行われているチーム医療を理解できる。 ・リハビリテーション医療におけるチームアプローチについて理解できる。 ・地域ケアにおける多職種・関係機関の連携について理解できる。	1○	4	後期	1	-	○	○	◎	◎
医療倫理	・生命倫理学が取り扱う概念(人格、尊厳死、インフォームドコンセントなど)について、様々な具体例を通して学習する。さらに、医療における倫理的問題について、事例検討を行うことで、生命、生、死についての理解を深める。なお、事例検討は看護学科、理学療法学科の学生の混成グループで行う。両学科の学生が共に課題に取り組むことにより、対象者の尊厳や権利を守り、よりよい選択を支援するために、チームとして協働することの重要性を学ぶ。	・現代医療における倫理的問題を知る。 ・四原則など生命倫理/医療倫理でなされている議論を理解する。 ・個々の事例において、たんに原則を適用するだけではなく、事例に則して決定、行為することができる倫理的判断力を修得する。 ・倫理に関する幅広い教養を身につけ、人権や生命の尊厳について深く理解し行動ができるようになる ・グループワークをとおして、対象者の尊厳や権利を守り、よりよい選択を支援するために、チームとして協働することの重要を理解する。	1○	3	前期	2	授業の最終段階では、ビデオ視聴による事例を通して看護学科の学生とグループディスカッションし、様々な意見・視点を理解する。また、IPEの一環として行っている	○	◎	◎	△
医療リスクマネジメント論	・今、なぜ医療安全が注目されているのかについて理解し、病院・医療福祉施設における医療事故防止(感染予防対策含む)、事故発生時(後)の対応など、医療安全のためのリスクマネジメントについて学ぶ。また、さまざまな施設でチームの一員として将来医療に従事する学生が、リスクマネジメントにおける他職種間での連携を考える機会とする。	・医療職を目指すものとして、医療安全を学ぶことの大切さを説明できる。 ・医療事故の定義・分類について説明できる。 ・わが国の医療安全施策と組織的安全管理体制への取り組みについて述べられる。 ・医療事故発生のメカニズムと事故分析・事故防止対策について述べられる。 ・医療事故によって対象、および当事者への心理 ・社会的影響と危機介入の原則について述べられる。 ・業務上起こりうる感染や転倒のリスクを理解し、その予防策について述べられる。 ・多職種連携の観点から、医療(実習)現場で起こりうる事例をもとに医療リスクマネジメントのプロセスを分析し、記述できる。	1○	3	前期	3	-	○	◎	◎	△
医療経営論	・医療・介護領域の臨床現場において患者(利用者)に対して一定水準以上のサービスが効果的に提供されるために必要な起業・経営マネジメントの資質・要件について理解できるようになることを目的とする。	・医療介護領域における起業しその事業展開するために必要な事業計画力や、その事業を安全かつ円滑に運営・発展させるために必要な事業管理力、つまり提供サービス水準を維持向上させるためのマニュアル作成力と職員教育研修・教育力、事業展開のための各事業部門実態・実績把握のための実績情報集積分析力、各種記録・報告やサービス提供環境などの整備力、また事故・クレーム対応などのリスク管理力について理解するとともに、専門職としてのサービス成果やコスト感覚の重要性について述べることができる。	1	4	後期	3	-	○	○	○	○

授業科目名	授業科目のねらい	授業科目の到達目標	単位数 (○印は 必修)	配当 年次	開講 区分	レベル (低1~4高)	アクティブラーニング※の 実施について (具体的にお書きください)	知識・理解 (基礎力)	汎用的技能 (思考力・実践力)	態度・志向性 (思考力・実践力)	統合的な学習経験と創 造的思考力(実践力)
医療と家族社会学	・近年、わが国の家族は急速に変化しつつあるといわれている。この授業では、高度産業化・情報化および少子化・高齢化といったマクロな社会変動と連動して、夫婦や親子などの家族関係に何が起きているのかを、今日関心の高まっている「高齢者介護」という社会問題を通して理解することを目的とする。	・個々人が無意識のうちに自明視している家族イメージを確認し、多様な家族に対して相対的な認識をすることができる。	1	1	後期	1	-	○	○	○	○
人権擁護論	・人権に関する宣言や条約などを理解し、身近な人権問題を読み解きながら道徳的アプローチを展開する。人びとが営んでいる世界は、言語・習慣・文化を異にする人びとと共に暮らしているが、ここではBasic Human Needs(基礎的人権需要)という人間として生命を全うするために最低限必要な食べ物、水、住居、衛生、医療などについて、世界的視野および自身の身近な暮らしの中からそれらを読み解いていく。そして、市民自由保障を前提としての地域のシビア・ミニマム、国家でのナショナル・ミニマムと同時に、地球規模でのグローバル・ミニマム(生存のために必要な需要の充足と環境保全)の達成目標について学習する。	・人権に関する宣言や条約などを理解できる ・基礎的人権需要について理解できる ・自身の人権について探求することができる	1	4	後期	1	-	○	○	○	○
国際保健	・世界の様々な国・地域の健康状態について、国際機関等のデータベースを活用しながら分析を行い、健康水準の格差やその格差が生じる要因を理解する。健康水準の改善のための方策について、政府及び国際機関のみならず、NGO・NPOの具体的取組を知る。国際的視点から地球市民としての自覚に基づき、自国と諸外国の健康問題について理解する能力を養う。	・世界の様々な国・地域の健康状態について、国際機関等のデータベースを活用しながら分析を行い、健康水準の格差やその格差が生じる要因を理解する。 ・健康水準の改善のための方策について、政府及び国際機関のみならず、NGO・NPOの具体的取組を知る。 ・国際的視点から地球市民としての自覚に基づき、自国と諸外国の健康問題について理解する能力を養う。	1	4	後期	3	-	○	○	○	○
統計学	・統計学は実験や観察によって得られた限られた情報から、その情報の背後にある世界のあり方を推測する理論であり、自然科学・社会科学を問わず現代の科学の基礎となっている。この講義では統計学の基本的な概念と考え方、計算方法を学ぶ。	・統計学の基本的な考え方を理解することで、基本的な推定や検定の計算ができるようになる。	2	1	後期	1	-	○	○	△	△
理学療法概論	・理学療法士は疾病や障害を有する人の運動機能や基本動作能力の改善・向上を目指し治療を行う専門職者である。理学療法士を目指した動機を明確にし、理学療法士になるために必要となる知識や技術を概略的に理解する。そのために、まず理学療法の対象疾患や治療手段などを教授する。さらに、理学療法の現状をはじめ、歴史、理念、教育、役割などを学修し、理学療法士のイメージをより具体的に理解することによって、理学療法士への意欲を高める。	・理学療法士の役割を述べることができる ・理学療法の治療手段の種類と特徴を述べることができる ・日本における理学療法士の現状を説明できる	1○	1	前期	2	-	○	○	◎	△
基礎ゼミⅠ	・少人数のゼミで、大学における学習の方法と学内の教育資源の活用方法を学ぶ。また、グループ内での交流を通して、人の意見を聞き、自己の意見を人に伝えるためのコミュニケーション力を養う。人の身体のしくみについて興味をもち、リハビリテーションや理学療法について理解を深める。	・大学生として学ぶ姿勢・心構えを自覚する。 ・授業中等で必要なことや重要なことを記録に残すことができる。 ・人の意見に傾聴し、自分の意見を正しく伝えることができる。 ・図書館の利用による資料の収集をし、それらを適切にまとめることができる。 ・人の身体のしくみについて興味をもつことができる。	1○	1	前期	1	各自の興味を持つテーマについて調べ、公表し、他学生と意見交換する。さらにグループを形成して、共通のテーマについて調べ発表会をし、知識を共有する。	△	○	◎	△
基礎ゼミⅡ	・医療従事者として必要な主体的に学ぶ能力と問題解決能力の基礎を培う。基礎ゼミ内で意見交換を行いながら自力で調査や文献収集などの計画を立て、成果をまとめる。さらに効果的なプレゼンテーションを行うための能力を養う。	・目的に合った情報や資料の収集ができる。 ・図書館の利用による資料の収集ができる。 ・協調したグループワークができる。 ・病気や怪我について関心を示すことができる。	1○	1	後期	1	医療・医学に関する興味を促進するために、各自の興味を持つテーマについて調べ、自力で発表をし、他者の発表も聞き知識を共有する。	△	○	◎	△
理学療法研究法	・本講義では、理学療法のガイドライン、研究デザイン、研究計画の立案、研究の実例とデータ収集・解析方法、研究から立案された理学療法について学習する。	・理学療法分野で使われている研究デザインが理解できる。	1○	3	後期	3	-	◎	◎	◎	◎

授業科目名	授業科目のねらい	授業科目の到達目標	単位数 (○印は 必修)	配当 年次	開講 区分	レベル (低1~4高)	アクティブラーニング※の 実施について (具体的にお書きください)	知識・理解 (基礎力)	汎用的技能 (思考力・実践力)	態度・志向性 (思考力・実践力)	統合的な学習経験と創 造的思考力(実践力)
卒業研究	・理学療法における課題や問題などを科学的根拠に基づいて解決する姿勢と能力を高めることを目的とする。卒論テーマは、学生個人個人の興味ある理学療法分野やリハビリテーション分野で設定し、研究計画に沿って必要な情報や資料を収集・整理し、研究の基本的な手法を教授する。文献収集・抄読、実験や調査、そして論文作成の過程を通して、課題の分析法、実験や調査にあたっての倫理的配慮、必要書類の作成などについて総合的に学習し、医療分野に働く専門職として必要な基礎知識と技法を修得する。	・研究デザインが作成できる。 ・精度高い測定ができる。 ・測定結果の分析ができる。 ・理学療法との関連も含め文献的考察ができる。	2 ○	4	後期	4	数名の研究グループで研究のテーマから計画立案、研究実践と成果発表まで、全て個人またはグループで一つもしくは複数の課題について取り組んでいく。	△	○	○	◎
職場管理論	・患者に対する適切な理学療法実施には、医療に対するニーズの多様化および多元化により医療サービスの妥当性が評価されることから、理学療法部門の適切な管理・運営が必須条件となる。職場管理論では、施設における理学療法部門の役割や位置づけをはじめ、診療報酬体系、医療安全対策と事故への対応、疾病に関連したリスク管理などを論じる。	・リハ医療における安全管理の重要性を述べることができる ・リスクマネージメントの考え方と安全管理マニュアルについて説明できる ・各疾患のリスク予想と急変時の対処法を述べることができる	1	4	後期	3	-	○	○	◎	◎
理学療法総合演習	・理学療法士国家試験に向けて準備を行う。国試の過去出題問題を、一つ一つ解説し理解を深め応用をつける。国家試験問題は理学療法士として必要な知識が網羅されているので、4年次までの学習内容を整理し体系化する。分野ごとに国家試験と同等の問題で学内試験を行うことにより到達度を明確にする。	・基礎医学に関する正しい知識を深める。 ・臨床医学に関する正しい知識を深める。 ・標準的な理学療法に関する正しい専門知識を深める。 ・標準的な理学療法の実技に関する正しい専門知識を深める。	1 ○	4	後期	4	一人ではできにくいことを他者との協働で理解力・思考力を高めていくようにグループ形成させる。教員による講義に基づいて、自らが必要とする知識を追及し、グループ学習によって解決していくようにする。	◎	◎	○	○
医療統計学	・本講義では、理学療法士に必要な研究デザインとその統計処理方法について教授する。	・理学療法分野で使われている研究デザインとその基本的な統計処理の方法が理解できる。 ・統計処理に必要なパソコンの操作ができる。	1 ○	3	前期	3	-	○	◎	○	○
理学療法評価学	・理学療法評価学は対象者の障害レベルや問題点を検証するために必要となる、各種検査方法の知識・技術を習得する科目である。評価結果より導き出された問題点が、治療目標や治療プログラムに直結するため、理学療法においては重要な位置づけの科目といえる。当科目ではバイタルサインのみかた、運動器を評価するための関節可動域テストと徒手筋力検査法を教授する。	・理学療法を実施するうえで重要な生命徴候や運動器評価の意義が説明できる。 ・運動器を評価するための検査測定項目を類別できる。 ・健常者に対し精度の高いバイタルサインの測定、関節可動域テスト、徒手筋力検査が実施でき、得られた値を正確に判定できる。	2 ○	2	前期	3	-	◎	○	○	◎
運動機能障害診断学Ⅰ	・運動機能障害診断学では、まず、画像診断について学習する。画像診断は、各機器の原理を理解した上で、骨関節の正常の画像と代表的な疾患の画像所見を理解することを目標とする。次に、骨・関節障害の機能的異常の見方について学習する。骨・関節障害に対しては、臨床徒手検査法の手技の習得を目標とする。	・骨・関節の正常の画像と代表的な疾患の画像所見を理解できる。 ・骨・関節障害に対する臨床徒手検査法の意義を理解できる。 ・骨・関節障害に対する臨床徒手検査法の手技を実施できる。	1 ○	2	後期	3	1症例づつ提示し、学生2.3名でその症例について検討する。ロールプレーをしながら、患者の症状の理解と徒手検査技術を磨くようにしていく。	○	◎	△	△
運動機能障害診断学Ⅱ	・画像診断は、各機器の原理を理解した上で、胸部、脳脊髄の正常の画像と代表的な疾患の画像所見を理解する。次に、内部障害の機能的異常の見方について学習する。主に聴診、打診、触診の手技の習得する。 ・小児の運動機能診断では、姿勢・運動発達における正常の発達過程と、その過程の姿勢・動作を分析する。特に生下時に見られる原始反射がどのように出現・統合していくのか、また生後12ヶ月までの発達の中でどのように筋力が発達し、正常動作を獲得していくかについて理解を深め、そこから逸脱する異常な発達やその境界の診かたについて学ぶ。	・胸部、脳脊髄の正常の画像と代表的な疾患の画像所見を理解する ・内部障害では、主に聴診、打診、触診による評価手技を習得し、結果を解釈できる。 ・正常運動発達の過程、各月齢で獲得する姿勢や動作を理解する ・正常な姿勢や動作と、筋力・筋緊張の関係を理解し、動作から筋活動を予測できる。 ・反射検査について理解し、正常からの逸脱した異常な姿勢・動作のみかたを習得する	1 ○	2	後期	3	-	◎	○	○	○
理学療法評価学演習	・理学療法評価学演習では、対象者の障害像の理解と問題点抽出及び適切な治療プログラムの立案に不可欠な検査・測定方法を教授する。既習の評価知識・技術を基に、障害や異常な動作より、対象者個々の問題点の明確化に必要な検査方法を選び、正しい検査技術の実践を目的に、学生間による実技練習も実施する。また検査結果を解釈する能力を高め、結果等を正しく記載・報告する方法も教授する。	・各種神経学的検査を用いた評価方法が説明できる。 ・成人中枢神経疾患の病態と対応する評価方法が指摘できる。 ・成人中枢神経疾患の病態に対応する評価を選択し実施できる。 ・既に学習した各種測定方法(MMT・ROM・バイタルサイン・形態測定)を正確に効率よく実施することができる。	2 ○	2	後期	3	-	◎	○	○	◎

授業科目名	授業科目のねらい	授業科目の到達目標	単位数 (○印は 必修)	配当 年次	開講 区分	レベル (低1～4高)	アクティブラーニング※の 実施について (具体的にお書きください)	知識・理解 (基礎力)	汎用的技能 (思考力・実践力)	態度・志向性 (思考力・実践力)	統合的な学習経験と創 造的思考力(実践力)
理学療法計画論	症例紹介書の形式で示されているペーパー・ペイ シメントを題材に理学療法対象疾患・障害患者関 する評価から治療までを教授する。 学生による模擬患者役と実際の患者様を対象に、 セラピストとして評価実習を実施することにより、基本 的な知識や技術を確し、理学療法の進め方を教 授する。 臨床実習で経験する代表的な疾患として、主に骨 関節障害、脳血管障害等を取りあげて理学療法評 価の実際を教授する。 患者様の生活機能である心身機能・身体構造、活 動、参加レベルにおける障害の分類とその相互関 係を教授する。 障害の理解を深め、理学療法計画の立案を教授す る。	変形性関節症・外傷を中心とした骨関節障害 の理学療法計画が理解できる。 脳血管障害の理学療法計画が理解できる。 上記の標準的な知識と技術を理解したうえ で、下記の事項を目標とする。 医療面接と観察や診療記録等から理学療法 上必要な対象者の情報を収集し、リスク管理 および焦点を絞った検査・測定が理解でき る。 医療面接と観察や診療記録等から理学療法 上必要な対象者の情報を収集し、リスク管理 および焦点を絞った検査・測定が理解でき る。 理学療法検査を適切に選択し実施できる。 各検査結果の解釈や検査項目間の関係の 解釈・分析ができる。理学療法を実施する上 で優先的に対応すべき問題点と目標を具体 化できる。 これらの過程を通じて、理学療法に必要な問 題解決能力を身につける。 対象者の評価、治療プログラム、経過記録等 について簡潔に記述し報告することができる。	2 ○	3	後期	3	1症例はペーパーペイシ メント、2症例は学生(4年生) を模擬患者役にさせて、3 年生がPT役となるロール プレーをすることで、実際 の臨床に即した思考・行 動・態度を身につけるよ うな学習をする。PT役は2、 3名のグループとし他者の 意見を聞きながら自らの知 識と行動力を高めていくよ うにグループワークをす る。	◎	◎	◎	◎
基礎運動療法学	・理学療法士の具体的な役割を知るために、理学 療法の中心的治療手段である運動療法の概念と 各々の治療手段の種類を理解する必要がある。 ここでは、まず、各治療手段の基礎的知識と基本的 技術の理解と習得を目指す。そして、理学療法の理 解を深めるとともに、理学療法士になるための学習 意欲の向上を図る。	・治療手段の種類とその目的を述べることが できる ・各々の治療手段における具体的な運動方 法を述べることができる ・様々な障害と治療手段との関係を示し、そ の影響(効果)を説明できる	1 ○	2	前期	3	—	◎	○	○	△
筋骨格障害理学療法学Ⅰ	・代表的な整形外科疾患に対する理学療法に関す る評価と治療法を理解し、適切な理学療法が実施 できる。	・代表的な整形外科疾患に対する機能障害 を理解できる。 ・各疾患に対する理学療法評価を理解でき る。 ・患者の問題点を把握することができる。 ・各疾患に対する運動療法およびADL指導 を理解できる。	1 ○	2	後期	3		◎	◎	○	○
筋骨格障害理学療法学Ⅱ	・四肢・体幹の筋骨格障害に対する理学療法の理 論と実際について学習する。本授業では、上腕骨 近位端骨折、上腕骨顆上骨折、橈骨遠位端骨折、 疼痛、複合性局所疼痛症候群、肩関節周囲炎、肩 腱板損傷、肩関節拘縮、胸郭出口症候群などの代 表的な疾患・症状を取り上げ、各病態と具体的な理 学療法について学習し、理解できるようになることを 目的とする。さらには、女性と運動器に関する理解 を深めることとする。	・各種疾患の病態・障害を理解する。 ・各種疾患の理学療法評価、問題点、目標、 治療プログラムを理解する。 ・各種疾患の理学療法技術を理解する。	1 ○	2	後期	3	—	◎	◎	○	○
物理療法学Ⅰ	物理療法学Ⅰでは、物理的刺激の中でもとりわけ寒 冷刺激、水による刺激、機械的な刺激を中心に、そ れらの刺激が生体に及ぼす影響を解剖生理学的に 捉え、各種疾患に対し各種治療機器を用いた実践 的な治療方法を習得する科目である。授業では、理 学療法士として正しく安全な治療介入ができるよう、 適応と禁忌の知識面だけでなく、各種機器の操作 能力の獲得も目指した授業を展開する。また、女性 に特化した内容として、乳癌や子宮癌後のリンパ浮 腫等に対する理学療法の授業も行う。	・各種治療機器の特性や禁忌事項が説明で きる。 ・治療に用いる刺激の効果を解剖生理学的 に理解し説明できる。 ・各種疾患に適応する機器が選択でき正しく 操作ができる。	1 ○	3	前期	3	—	◎	◎	○	◎
物理療法学Ⅱ	・物理療法は、熱、水、電気、光、徒手などの物理 的エネルギーを人体に用いる治療法であり、患部の 疼痛の緩和、循環の改善、リラクゼーションなどを目 的としている。本授業では、光線療法・温熱療法・電 気刺激療法の作用機序、治療効果・目的、適応、禁 忌などの理論を理解し、臨床場面を想定した物理 療法機器の操作方法に関する実習を行う中で、特 に適切な刺激条件の設定、各種物理的エネルギー による生体反応の解剖学的、神経生理学的な検証 を行い、物理療法と運動療法・日常生活活動指導 ・義肢装具療法などを組合せた治療システムを学 び、物理療法技術を実践できるように学習する。	・各種物理療法の作用機序、治療効果・目 的、適応、禁忌などを理解し、臨床場面を想 定し物理療法を実践できる。 ・物理療法と生体反応との関係を解剖学的、 神経生理学的な実験検証から理解できる。 ・物理療法と運動療法・日常生活活動指導 ・義肢装具療法などを組合せた治療システム を理解できる。	1 ○	3	前期	3	—	◎	◎	○	○

授業科目名	授業科目のねらい	授業科目の到達目標	単位数 (○印は 必修)	配当 年次	開講 区分	レベル (低1～4高)	アクティブラーニング※の 実施について (具体的にお書きください)	知識・理解 (基礎力)	汎用的技能 (思考力・実践力)	態度・志向性 (思考力・実践力)	統合的な学習経験と創 造的思考力(実践力)
脳血管障害理学療法学Ⅰ	・脳血管障害理学療法学では、成人期および老年期に出現する脳梗塞や脳出血などの脳血管障害によって発生する中枢神経麻痺の運動障害について、その特徴と病態、運動再学習の理論と具体的な技法について教授する。特に、片麻痺については、陰性症状と陽性症状についてその発生メカニズムを詳細に解説し、中枢神経系運動障害に対する運動療法の基本原則と治療体系について教授する。また、脳卒中片麻痺の事例を提示し、病態に基づく動作分析の視点や臨床的思考過程を概説し、動作分析から報告のプロセスを経験する。	・脳血管障害の疫学と病態について復習し、知識を整理する。 ・脳卒中片麻痺の障害像と発症メカニズムを理解する。 ・脳卒中片麻痺の評価について復習し、知識と技術を整理する。 ・脳卒中片麻痺の急性期リハビリテーションに必要な技術を習得する。 ・脳卒中片麻痺の回復期リハビリテーションに必要な技術を習得する。 ・脳卒中片麻痺の神経科学的治療についての基礎知識を学習する。 ・脳卒中片麻痺の動作分析に必要な知識、分析の流れ、報告の手順を理解する。	1 ○	2	後期	3	—	◎	○	○	○
脳血管障害理学療法学Ⅱ	・脳血管障害理学療法学では、脳梗塞や脳出血などの脳血管障害によって発生する中枢神経麻痺の運動障害と、これに対する理学療法について学ぶ。	・脳血管障害の疫学と病態について復習し、知識を整理する。 ・脳血管疾患の障害像と発症メカニズムを理解する。 ・脳血管疾患の評価について復習し、知識と技術を整理する。 ・脳血管疾患の急性期リハビリテーションに必要な技術を習得する。 ・脳血管疾患の回復期リハビリテーションに必要な技術を習得する。 ・脳血管疾患の神経科学的治療についての基礎知識を学習する。	1 ○	3	前期	3	—	◎	○	○	◎
小児期障害理学療法学	・運動障害をもつ子どもへの理学療法の理解や知識を深め、評価や治療の考え方や方法を習得する。 ・脳性麻痺、二分脊椎、筋ジストロフィー、ダウン症などの障がいをもつ子どもや、低出生体重児などの理学療法を必要とする子どもたちに対するアプローチとして、以下の知識や問診の進め方、評価技法、ハンドリングや治療方法を習得する。	・小児の評価 小児疾患の病態・機能障害・予後予測に基づいた評価、正常発達と異常発達、発達の見方や考え方、反射検査、母親への問診、問題点の抽出 ・小児理学療法の治療 療育の考え方、治療の基本原則とプログラムの立案、病態に応じた治療方法、ハンドリングと運動療法、補装具や器具の活用、環境調整	1 ○	3	後期	3	—	◎	○	○	◎
スポーツ障害理学療法学	・スポーツ外傷(急性外傷と慢性外傷)の理学療法は、幅広い理学療法の中のごく一部にしか過ぎない。従って、他の分野における理学療法の考え方をよく理解した上で、それらを活用しながら知識や技術を高めるよう努力する必要がある。特に運動学や整形外科などの知識を再確認し、スポーツ外傷に対する理学療法に関してより一層の知識を深めていくことを目的とする。運動学や整形外科などの知識を確認しながら、代表的なスポーツ外傷を教授する。特にスポーツ外傷発生要因とその機序を教授する。そして、標準的なスポーツ外傷に対する理学療法評価とその応急処置からアスレチックリハビリテーションについて具体例を示しながら教授する。さらに、女性アスリートに特有なスポーツ外傷についても教授する	・代表的なスポーツ外傷(急性外傷と慢性外傷)を理解できる。 ・スポーツ外傷の発生要因について理解できる。 ・代表的なスポーツ外傷のアスレチックリハビリテーションが理解できる。 ・女性アスリートに特有なスポーツ外傷を理解できる。	1 ○	3	前期	4	—	◎	◎	◎	◎
義肢装具学Ⅰ	・義肢装具学Ⅰでは、医療や福祉分野で使用される装具を対象に、装具の定義、分類、特徴などの基礎的知識や、各種装具の適応および適合判定(チェックアウト)、装具療法に関する臨床的知識を習得する。	・医療・福祉分野で使用される装具の種類、特徴、機能が説明できる。 ・対象者の障害レベルに応じた各種装具の類別ができる。 ・各種障害に対する装具の選択と適合判定ができる。	1 ○	3	前期	3	—	◎	○	○	◎
義肢装具学Ⅱ	・切断のリハビリテーションにおいて、理学療法士は、断端機能を改善させ、適合した義肢で生活動作が獲得できるよう理学療法を実施する。そのためには、切断のリハビリテーションの流れを理解することと義肢の構造と機能を理解することが不可欠である。講義では下肢切断を中心に義肢の構造とその操作に必要な身体機能、理学療法理学療法士の役割を学習する。	・切断者のリハビリテーションの過程および理学療法士の役割が説明できる。 ・切断原因、断端管理、義肢の装着時期等の特徴や留意点が説明できる。 ・切断高位に準じた義肢と、それを構成する各部品の特徴が説明できる。 ・切断者の評価および各義肢の適合判定が行え、異常歩行の原因が説明できる。 ・理学療法プログラムが設定でき、義肢装着下におけるADL指導ができる。	1 ○	3	後期	3	—	◎	○	○	○
内部障害理学療法学Ⅰ	・内部障害理学療法学Ⅰでは、急性呼吸不全、慢性呼吸不全(慢性閉塞性肺疾患、喘息)の呼吸器系疾患、高血圧や心筋梗塞や血管疾患などの循環器系疾患に対する運動療法の基本原則と実際について教授する。呼吸、循環の授業の初期に提示された症例の情報収集、解釈、病態の把握を学生自身で行うことを通して、内部障害患者の病態の把握、リスク管理について学習する。	・理学療法士に必要な内部障害の病態を理解する。 ・呼吸器疾患に対する理学療法の臨床思考過程(必要な知識、評価、問題点抽出、プログラム作成)を習得する。 ・循環器疾患に対する理学療法の臨床思考過程(必要な知識、評価、問題点抽出、プログラム作成)を習得する。	1 ○	3	前期	3	—	○	◎	◎	△

授業科目名	授業科目のねらい	授業科目の到達目標	単位数 (○印は 必修)	配当 年次	開講 区分	レベル (低1~4高)	アクティブラーニング※の 実施について (具体的にお書きください)	知識・理解 (基礎力)	汎用的技能 (思考力・実践力)	態度・志向性 (思考力・実践力)	統合的な学習経験と創 造的思考力(実践力)
内部障害理学療法学Ⅱ	・内部障害理学療法学Ⅱでは、肥満や糖尿病などの代謝系疾患に対する評価法と治療法の基本を実践的に学ぶ。代謝疾患は循環器疾患や脳血管疾患と関連が深いことを理解し、一次予防(健康増進)としての運動療法を含め、代謝疾患に対する予防的リハビリテーションの概念を学ぶ。治療については、エビデンスに基づく治療法から最新の知見までを深く学ぶ。	・代謝疾患の予防や再発防止のための予防的リハビリテーション医学の概念を理解できる。 ・代謝疾患に対する評価ができる。 ・代謝疾患に対する理学療法プログラムを立案することができる。	1 ○	3	後期	3	-	◎	◎	○	◎
老年期障害理学療法学	・老年期障害理学療法学では、老年者の身体的、心理・社会的な特徴、老年期における理学療法の役割などについて総合的に学習し、老年期特有の理学療法評価と治療の方法論について教授する。また、老年者の介護予防に必要な知識の習得と具体的な方法論についても指導する。演習では、老年者の生活を支援するシステムである介護保険制度や社会福祉制度とそれに関わる理学療法に関してグループ学習を通して理解を深める。 1. 加齢に伴う形態・生理的变化について概説し、合わせて理学療法の実際について教授する。 2. 老年者の心理・社会的な特徴の解説と介護予防の具体的方法を教授する。	・加齢に伴う形態・生理的变化について理解する。 ・高齢者の理学療法について理解し、治療技術を習得する。 ・老年者の心理・社会的な特徴について理解する。 ・介護予防に必要な評価技術と介護予防教室の運営について理解する。	1 ○	3	後期	3		◎	○	○	○
神経筋障害理学療法学	・筋萎縮性側索硬化症、運動失調症、パーキンソン病、重症筋無力症、末梢神経損傷、多発性硬化症、ギランバレー症候群、慢性炎症性脱髄性多発神経炎、筋ジストロフィー、多発性筋炎などの神経・筋に起因する運動機能障害の病因、病態、回復過程、予後に関する知識について学習する。それらの知識を基に、それぞれの疾患の運動機能障害の特徴について理解し、回復促進・残存機能障害および障害の予防に対する理学療法評価、理学療法プログラムを学習することを目的とする。	・筋萎縮性側索硬化症に対する理学療法評価、プログラムを理解できる。 ・運動失調症に対する理学療法評価、プログラムを理解できる。 ・パーキンソン病に対する理学療法評価、プログラムを理解できる。 ・重症筋無力症に対する理学療法評価、プログラムを理解できる。 ・末梢神経損傷に対する理学療法評価、プログラムを理解できる。 ・多発性硬化症に対する理学療法評価、プログラムを理解できる。 ・ギラン・バレー症候群に対する理学療法評価、プログラムを理解できる。 ・慢性炎症性脱髄性多発神経炎・筋ジストロフィーに対する理学療法評価、プログラムを理解できる。 ・多発性筋炎に対する理学療法評価、プログラムを理解できる。 ・固有受容性神経筋促進法の理論と基本手技を理解できる。	2 ○	3	後期	3	-	◎	◎	○	○
脊髄障害理学療法学	・脊髄の解剖・生理の知識を確認し、脊髄の外傷や疾病により出現する種々の症状を理解する。これらを基礎として、理学療法評価とその解釈、治療プログラムの立案、治療の実際について学習する。	・脊髄障害の理解に必要な解剖・生理・運動学の知識を整理する。その上で脊髄障害の病態を理解し、評価や治療プログラムの立案ができるようにする。	2 ○	3	後期	3	脊髄障害者は、車いすが移動手段となることが多い。段差、溝等乗り越えるには、前輪上げが必須となる。二人一組で練習し可能となるように取り組んでいる。	◎	○	◎	○
理学療法行動科学	理学療法行動科学では、各種疾患や障害をもつ患者の心理・社会的背景や行動特性など健康心理学の基礎知識を解説し、健康管理や障害受容あるいは自立生活への復帰を促すための教育や援助方法について教授する。講義では、行動科学や健康心理学の各種理論に基づいた患者教育や患者指導の方法論についても解説し、具体的な実践事例などを供覧しながら疾病予防や健康増進の具体的なアプローチについて理解させる。さらに、患者が呈する問題行動への対処や患者の意欲を向上させる上で必要となる応用技法として、応用行動分析学についてもその理論と各種技法を教授する。	・健康心理学と行動科学の必要性を理解する。 ・障害を抱えた患者の行動特性や行動パターンを理解する。 ・行動分析学の基礎を理解し、実践応用できるスキルを獲得する。	1 ○	3	後期	3		◎	○	○	○

授業科目名	授業科目のねらい	授業科目の到達目標	単位数 (○印は 必修)	配当 年次	開講 区分	レベル (低1~4高)	アクティブラーニング※の 実施について (具体的にお書きください)	知識・理解 (基礎力)	汎用的技能 (思考力・実践力)	態度・志向性 (思考力・実践力)	統合的な学習経験と創 造的思考力(実践力)
原書講読	・原書講読では、学術雑誌に掲載されている理学療法関連の論文(和文、英文)を教材とし、研究論文の読解力を養うとともに、専門用語や独特の表現について理解する。また、理学療法の研究動向や理学療法の位置付けについても、文献講読を通して理解する。	・理学療法に関する論文(和文、英文)の検索ができる。 ・論文の読解を通し、論文の構成や専門用語の理解、グラフ解釈ができる。 ・論文を読解を通し、国内外の理学療法の研究動向を理解する。	1 ○	3	前期	3	スマートフォンを使って、検索エンジンから文献検索を行う 二人組で日本語論文をまとめ、内容を発表、質疑応答を行う 国際学会で発表されたポスター発表の抄録を和訳し、それを基に学生もプレゼンテーションを実施、質疑応答を行う	◎	◎	○	○
日常生活動作学	・日常生活動作学では人間の日常生活の基本として遂行される動作の遂行に必要な条件を解説するとともに、日常生活活動の概念、位置づけを教授する。脳卒中片麻痺などを中心に、脊髄損傷や人工関節置換術後など活動・参加に制限を有する疾患や障害者の生活自立を目指した指導方法、介助方法を学ぶ。さらに、日常生活活動の代表的な評価方法について教授する。	・日常生活動作に対する基本概念を理解する。 ・対象者の状態を把握し、適切な評価を実施することができる。 ・対象者の心身機能、活動状況に応じた動作方法、介助方法を検討、選択、実施できる能力、技術を身につける。 ・理学療法アプローチとして、対象者に応じた技術を指導する技術を身につける。	1 ○	3	前期	3	-	◎	◎	○	○
理学療法技術特論	生まれてから亡くなるまでに女性がたどる一般的な生活史を知り、その流れに沿って各場面に寄与できる女性理学療法士の役割について学ぶ。女性ならではの理学療法についての意識や知識を、幅広い視点から醸成することを目的とする。	・女性の生活史の中での健康問題について理解することができる。 ・理学療法士が女性の健康に寄与できる場面を理解することができる。 ・女性の理学療法士として医療保健福祉領域に関わる意識を高めることができる。	1 ○	4	後期	3	最終授業にてグループごとに各授業のまとめ、理学療法士としてどのように関わられるかを具体的に考え発表する。	◎	○	○	○
地域理学療法学	・リハビリテーション医療は、急性期・回復期・生活期(維持期)で提供されており、急性期病院、リハビリテーション専門病院、介護老人保健施設、在宅等での継続性が必要である。身体に障害を持つ人や高齢者が住み慣れた地域で安全に生き生きとした生活ができるように、理学療法士の立場から支援していくための知識・技術を学習する。	・地域理学療法を理解し、必要な知識・技術を説明・実施できることを目標とする。	1 ○	2	後期	3	障害を有する患者が、病院・施設から自宅復帰する時に、医療、介護、福祉等どのような手立てが必要か、3~4名で事例検討を行っている。	○	○	◎	◎
福祉用具・生活環境論(各論)	・理学療法に必要な福祉用具・住環境整備に関する知識および技術を教授する。車いすに関する知識とそのメンテナンス方法や対象者への適合を含めた技術を身につける。さらに福祉用具を用いた移乗介助技術を学ぶことで、腰痛予防の考え方を学ぶ。ゲストスピーカーによる講義を通じて他職種の専門性の理解と連携についての知識を教授する。演習およびグループ検討を中心とし、対象者の状態を総体的に捉え多方面の支援策を考え、実践できる技術を習得する。	・対象者の心身機能・身体構造、活動、参加の状況および環境について検討することができる。 ・対象者に適した福祉用具や住環境整備について選択、提案できる。 ・車いすや移乗関連用具に関する知識を身につけるとともに、対象者に適した用具を選定し、使用できる。	1 ○	3	後期	3	・生活圏の環境について情報収集し、調べた結果をグループで成果物にまとめ、他者に分かりやすく伝える模擬事例の環境整備について、グループで模擬環境での動作確認のうえ検討を行い、その結果をまとめ、記録、発表する。	◎	○	○	◎
福祉用具・生活環境論(各論)	・理学療法に必要な福祉用具・住環境整備に関する知識および技術を教授する。車いすに関する知識とそのメンテナンス方法や対象者への適合を含めた技術を身につける。さらに福祉用具を用いた移乗介助技術を学ぶことで、腰痛予防の考え方を学ぶ。ゲストスピーカーによる講義を通じて他職種の専門性の理解と連携についての知識を教授する。演習およびグループ検討を中心とし、対象者の状態を総体的に捉え多方面の支援策を考え、実践できる技術を習得する。	・対象者の心身機能・身体構造、活動、参加の状況および環境について検討することができる。 ・対象者に適した福祉用具や住環境整備について選択、提案できる。 ・車いすや移乗関連用具に関する知識を身につけるとともに、対象者に適した用具を選定し、使用できる。	1 ○	3	後期	3	生活圏の環境について情報収集し、調べた結果をグループで成果物にまとめ、他者に分かりやすく伝える模擬事例の環境整備について、グループで模擬環境での動作確認のうえ検討を行い、その結果をまとめ、記録、発表する。	◎	○	○	◎
臨床実習 I	・臨床実習 I は学生が早い時期に、実際の理学療法士が活躍する臨床現場を見学することで、医療・福祉分野における理学療法士の業務内容や他職種との連携を学び、理学療法士への動機付けと学習意欲の向上を図る。また、社会人としてのマナーや医療人に求められるコミュニケーション能力の大切さを学ぶ。	・医療・福祉分野における理学療法士の業務内容や他職種との連携を理解できる。 ・理学療法士への動機付けと学習意欲を高めることができる。 ・セミナーではポートフォリオの体験シート、振り返りシートをもとに発表することができる。 ・個別の発表内容をグループでまとめることができる。 ・セミナーでの発表やまとめ作業を通じて、情報の共有化を図ることができる。	1 ○	1	前期	2	-	△	◎	◎	△

授業科目名	授業科目のねらい	授業科目の到達目標	単位数 (○印は 必修)	配当 年次	開講 区分	レベル (低1～4高)	アクティブラーニング※の 実施について (具体的にお書きください)	知識・理解 (基礎力)	汎用的技能 (思考力・実践力)	態度・志向性 (思考力・実践力)	統合的な学習経験と創 造的思考力(実践力)
地域理学療法実習	・地域理学療法実習は、少子高齢化・脱施設化に伴う現在の医療情勢において、理学療法士の活躍の場である地域リハビリテーションを、理学療法士養成過程の早期に見学・実習する科目である。高齢者や障害児・者とその家族を取り巻く社会環境を含めた包括的な地域リハビリテーションアプローチを学修する。そのためのシステムである関連諸制度や地域連携、物的及び人的社会資源などを学ぶ。また、各種施設あるいは在宅における対象者の捉え方や理学療法の知識・技術がどのように活用できるかを、グループワークでの事例検討を含めたプログラムに基づいて学習する。	・医療・福祉施設で実習を受ける上でふさわしい服装、身なりを整えることができる。 ・地域リハビリテーションを早期より見学・実習することで、理学療法士の職域を視野に入れた地域理学療法への興味を深めることができる。 ・臨床実習指導者の助言や指導を素直に受け止めることができる。 ・患者さんや指導者に対して自己表現をすることが出来る。	1 ○	2	後期	2	-	△	◎	◎	△
臨床実習Ⅱ	・臨床実習Ⅱは臨床現場において臨床実習指導者の指導・助言のもと、基本的理学療法検査・測定を実践し、1年次より3年次までに学習した科目の知識・技術を再確認する科目である。本実習では、対象者の問題点抽出や、記録・報告など理学療法における評価の過程を体験し、4年次配当の総合臨床実習に臨む意識付けを図る。	・実際の対象者を通じて、以下の内容を臨床実習指導者の助言のもとで行えることを目標とする。 ・医療面接と観察や診療記録等から理学療法上必要な対象者の情報を収集し、リスク管理および焦点を絞った検査・測定が理解できる。 ・理学療法検査を適切に選択し実施できる。 ・各検査結果の解釈や検査項目間の関係の解釈・分析を行い、さらに機能予後の予測障害分析ができる。 ・理学療法を実施する上で優先的に対応すべき問題点と目標を具体化できる。 ・これらの過程を通じて、理学療法に必要な問題解決能力を身につける。 ・対象者の評価、治療プログラム、経過記録等について簡潔に記述し報告することができる。	2 ○	3	後期	3	-	△	○	○	◎
総合臨床実習Ⅰ	・総合臨床実習Ⅰでは、臨床実習指導者の指導・助言のもと、対象者の評価・治療プログラムの立案を学び、学内授業で習得した理論と技術を応用し実践する。理学療法部門の業務・管理・運営を学ぶだけでなく、医療機関や福祉施設における各種組織との連携に関しても学習し、専門職としての理学療法士の資質を高める。	・対象者に理学療法を行う上で必要な知識・情報を収集し、適切なリスク管理・検査項目を選択し、実施することができる。 ・統合・解釈の結果から、対象者の問題点とその優先順位を把握し、適切な治療目標を設定することができる。 ・設定した治療目標に向けての適切な治療プログラムを立案することができる。 ・治療プログラムを実施し、対象者の反応と症状変化を評価し、必要に応じて治療プログラムの変更を行うことができる。 ・実習生かつ医療従事者としての自覚を持ち、対象者やスタッフに対する責任感、積極的な学習態度を高め、専門職を目指すにあたっての資質を備えることができる。	7 ○	4	前期	4	-	△	○	○	◎
総合臨床実習Ⅱ	総合臨床実習Ⅱでは、臨床実習指導者の指導・助言のもと、対象者の評価・治療プログラムの立案を学び、学内授業で習得した理論と技術を応用し実践する。理学療法部門の業務・管理・運営を学ぶだけでなく、医療機関や福祉施設における各種組織との連携に関しても学習し、専門職としての理学療法士の資質を高める。	・対象者に理学療法を行う上で必要な知識・情報を収集し、適切なリスク管理・検査項目を選択し、実施することができる。 ・統合・解釈の結果から、対象者の問題点とその優先順位を把握し、適切な治療目標を設定することができる。 ・設定した治療目標に向けての適切な治療プログラムを立案することができる。 ・治療プログラムを実施し、対象者の反応と症状変化を評価し、必要に応じて治療プログラムの変更を行うことができる。 ・実習生かつ医療従事者としての自覚を持ち、対象者やスタッフに対する責任感、積極的な学習態度を高め、専門職を目指すにあたっての資質を備えることができる。	7 ○	4	前期	4	-	△	○	○	◎